様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 22 日現在

機関番号：　１２６１３
研究種目：　基盤研究（Ｃ）
研究期間：　2008～2011
課題番号：　２０５２０１５５
研究課題名（和文）　初期江戸版の悉皆調査に基づく近世出版史の再検討

研究課題名（英文）　A revisional study on the publishing history with reference to the inventory survey conducted in the early Edo period

研究代表者
柏崎　順子（KASHIWAZAKI JUNKO）
一橋大学・大学院法学研究科・教授
研究者番号：20262389

研究成果の概要（和文）：　近世文学研究を出版史の解明という観点において考察する研究で、江戸初期の江戸と京都の出版物を書誌学的に調査した結果、江戸初期に江戸と上方の書肆の間に何らかの繋がりが存していること、テキストといった無体物に対する所有意識の在り方、江戸初期の江戸における出版界は伊勢商人と深く関わっている可能性を指摘し、そこから江戸初期出版界が生み出していくジャンルや流通の様相の再検討を可能にする新たな視点を指摘した。

研究成果の概要（英文）：　I have continued to investigate these findings, and am now quite sure that Shokai worked out a system for collection with other publishers. Furthermore, this collaboration was carried out only with other Edo publishers, but also with publishers in Kyoto and Osaka during these three terms. I hope that in these two papers I have helped to clarify the hitherto vague early history of Edo publishing practices.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２００９年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
２０１１年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：日本近世文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：書誌学・文献学

１．研究開始当初の背景

文学が出版という媒体によって展開するようになった近世において、出版史の解明は重要な問題である。しかし、これまでは、それぞれのジャンルごとに当該問題に取り組んでいるというのが実態であった。この方法は個別の作品や特定のジャンル内においては一定の成果をもたらしてきた。しかし、こうした取り組み方ではそれぞれの時代における出版界の全体像が浮かびあがってこない。そこで文学研究の通常の手法の基盤となっているジャンルという枠を超えて、時代を特定して出版物全体を調査することによって出版界の動向を考察し、そこから近世の文学が展開していく新しいジャンル、具体的には仮名草子というジャンルの本質を再検討することが可能であると考えた。研究代表者はその観点から、本科学研究費による研究以前より江戸初期の出版界において、ある特定の

期間にだけ作成された独特の造本様式を有する所謂江戸版の存在に着目し、そのような独特の本が何故一時期に限定して出版されたかを解明するべく調査を開始していた。具体的には江戸版を作成する中心的存在である書肆松会市郎兵衛とその子孫の出版した本の悉皆調査を目標として松会版の詳細な書誌を記載した目録作成を行い、暫定版として『松会版書目』（書誌学月報　別冊【10】、全 131 頁、青裳堂書店、2002 年）を出版している。この基礎的な資料の作成によって、松会を中心とする江戸版を作成する江戸資本の書肆の動向について整理を開始し、それに基づいて江戸版とその元版を出版している京都の書肆の関係や、京都版と江戸版の挿絵の関係、版権意識の問題等の考察をしていくことが可能であるとの目処をつけることができていた。

２．研究の目的

江戸時代という新たな時代に文学はどのように醸成されたかという点において、これまでの文学研究は新たに醸成されたジャンルの作品や作家等を分析するといういわば文学研究の常道でもってアプローチを積み重ねてきた。この方法によって多くの成果が上がっていることは言うまでもない。しかし、たとえどのような方法にせよ、一定の方法だけに研究が終始すれば、必ず分析の内容に偏向が生じることは否めないであろう。本研究はそのような問題意識から出発したものである。具体的には江戸初期に時代性を担ったジャンルとして登場してくる仮名草子というジャンルの再認識をする方法として、版本の書誌学的なアプローチによる出版史の再検討をとおして、そこから浮上するジャンルの意味を考察しようとする、新しい発想での文学研究である。このような方法をとることによって例えば元版である京都版と江戸版の関係を考察することは当時の出版界における所有意識の問題を考察することにもなり、法社会学的な成果が期待されるのであるし、次世代のジャンルである浮世草子が登場してくる背景を、これまでの作家や作品の研究とは異なる視点で考察してみることが可能であり、ジャンルを越境しての文学史の流れの必然性を解明していく可能性を有している。また、この方法は書誌学的な考察である点においてその考察要素である挿絵の研究が必須であるが、これは美術研究に寄与することにもなる。いわばこれまで様々な点においていくつかの分野の境界領域にあった問題であったが故に、重要な問題であるにもかかわらず手つかずであった問題に切り込むことのできる研究でもあり、いわば近世文学研究の新たな方法を模索することを目的とするものである。

３．研究の方法

文学研究といえば一般的には作品や作家の分析を通してジャンルや時代性といった文学史的なテーマに還元するという手法を用いるのが常道である。そうした文学研究の常道による方法で研究の成果が積み重ねられ、解明されてきたことが少なくないのも事実である。しかし常に同じ方法、同じ観点ではどうしても解明できない部分を残したり、あるいは見落としを生じたりすることになる。そこで本研究は近世文学研究を出版史の解明という観点において考察する研究で、これまでジャンルごとに行われてきた文学研究を、いったんその枠を取り払い、純粋に出版史研究という観点から版本を書誌学的に検討することによって浮上する出版界の様相から江戸初期に醸成されるジャンルの再定義や所有意識のあり方を考察するというかたちで文学研究に還元するという、従来には存しなかった視点でのアプローチによる新たな発想の研究の方法である。具体的には江戸初期、万治・寛文期という限られた時期に、京都版を元版としながら独特の造本様式で作成された所謂「江戸版」の調査を、これまでの予備調査を基に、より徹底的に精査し、京都版と江戸版の関係について書肆の問題、テキストの問題、流通の問題、版権の意識の問題等の考察を行う。従来の研究により所謂江戸版は貞享元年を境に激減し、替わって京都と江戸の書肆が共同で出版する二都版・三都版が増加すること等が指摘されているが、それ以前の出版界の状況を、従来の研究が事実をもって証明するのは困難と考え、状況証拠を積み重ねて真相に迫る方法を採用していたのに対して、あくまで事実をもって証明しようとしている点に特色を持つ研究である。

４．研究成果

（１）暫定版であった『松会版書目』を増補改訂した『増補松会版書目』（日本書誌学大系 96、青裳堂書店、全 256 頁、2009 年、）を出版し、より充実した基礎資料を作成したことにより、以後の本研究の基盤をかためた。本資料は松会版の冒頭部分や刊記部分の写真も後半に掲載したことによって、本研究のテーマに寄与するのみならず、仮名草子の研究全般に資料を提供するものと高く評価されている。

（２）江戸初期の万治・寛文期に集中して独特の造本様式の所謂江戸版が作成された

ことに注目し、江戸版とその元版である京版について書誌的調査を行った結果、京都と江戸の書肆に一定の関係性が看取された。従来は江戸の書肆松会が中心となって作成されている所謂江戸版は、江戸の書肆が勝手に京都のテキストを流用して作成していたとするのが学会の定説であったが、初期出版界の万治・寛文期に江戸と京都の書肆は何らかの繋がりが存したことが明らかになった。

（３）江戸版が作成される場合、いくつかの点において必ず京都版とは異なる造本様式が存在していることが、統計的に明らかになってきた。即ち京都版は行数が 12・3 行であったのが、江戸版は 15・6 行に改められること、挿絵が師宣風に描きかえられること、料紙の質が江戸版は漉き返しの料紙のなかでも特に精製の粗なものであること、版下の文字も江戸版特有の雰囲気があること等の特徴が明らかになってきた。以前からこの特徴は知られていたが、今回の江戸版およびその元版である京都版の精査によって、江戸版に仕立て直される際は以上の特徴がいわば法則のように厳密に守られていることが判明した。さらにいったん江戸版になった後は、同じテキストを他の江戸版を作成する書肆が利用して江戸版を作成することもしばしば見受けられるのであるが、その際は被せぼりにすることも、異なる様式にすることもあり、江戸内でのテキストの作成の仕方に法則性はない。つまり京都から江戸へ入るときに、造本様式を京都版とかえることによって、そのテキストを使用することを許認するようなことがあったのではないかと推測されるのである。

（４）また（３）の事実から江戸の書肆の間で江戸版を作成する本屋は個別に京都版のテキストを利用しているのではなく、ひとつのグループを形成して、京都版のテキストを利用している可能性が高いことも判明した。江戸版を作成する松会・山本九左衛門・本問屋が京都版のテキストを共有している例が少なからず存在するのである。

（５）以上のように、上方の書肆で出版された本が江戸で一定の造本様式で作成することによって許認されるということについての考察を行った。造本様式という、視覚的・物理的な点を変更すればテキストは同一でも出版を容認する理由として、モノとしてみたときに異なるものになっていることが、異なる商品と認識するような、現在とは異なる認識の在り方があった可能性を指摘した。出版物は日本の社会において無体物としての商品としてはじめて登場したものである。その当初から無体物を所有するという意識が現代と全く同一であったとは考えにくいのである。以上のような結論から、当初出版界で醸成されていった所有意識を考察する際にはジャンル毎の個別の事情から、テキストを所有する意識に若干の差異が生じていく様相を指摘し、そういう根本的な問題が、物の本と草子を分けていく要因にもなっているのはないかという、書誌学的アプローチであるからこそ見えてくる問題を指摘した。

（６）江戸と上方の書肆の関係性を考察するにあたって重要な観点に挿絵の問題がある。一般的に江戸版は菱川師宣がひきいる師宣工房で作成されていたとする所謂師宣風の挿絵であり、京都版は、主にやまと絵の伝統を継承した挿絵であるが、時々京都版に師宣風の挿絵が使用されていることがある。この事実は、師宣工房で作成されていたと考えられている菱川師宣の挿絵が、江戸から京都に供給されていた可能性を示唆している。そこで、師宣風の挿絵を有する京都版にその書肆や作品の内容、あるいは江戸の書肆との繋がり等、何らかの傾向がみだせないか調査を開始している。こうしたアプローチは美術研究における菱川師宣研究にも寄与するものである。師宣研究におけるこのような観点からの研究方法論を絵本ワークショップにおいて口頭発表した。

（７）江戸版を出版する中心的存在である書肆松会三四郎についての論文を発表し、一橋大学研究リポジトリで公開したところ、書肆松会の子孫の方から連絡をいただくことができた。松会氏からの菩提寺の所在や戸籍謄本の提供によって、松会家の出自が伊勢出身であることが判明した。研究代表者は本研究の途上、初期江戸出版界と伊勢に少なからぬ関係が存することに気がついていたが、松会家が伊勢出身、即ち江戸初期に新興の営業の地を求めて続々とやってきた伊勢商人であったとするならば、出版界の草創期は伊勢のもつ文化の影響を考慮して再認識する必要に迫られることになる。これは出版史の問題としては重要な問題である。この初期出版界と伊勢との関係の可能性について日本近世文学会において発表し、2011 年度に「江戸初期出版界と伊勢」という論文にまとめた。以上のことをふまえ、今後の江戸初期出版界の研究の方向性を決定することができた。

（８）江戸初期出版界が伊勢商人と深い関係にあるとすれば、江戸で新興の書肆が最

初に出版し始めたジャンルとして吉原の評判記が存することが注目される。評判記の出版は吉原の実態が把握できる人間が関与しなければ成立しないのであり、この点において出版・吉原・伊勢という関係の構図が浮上してくる。そう考えれば元吉原は新興の書肆の集中していた大伝馬町・通油町の近接していることが指摘できる。これは後に展開していく草双紙と吉原の関係を考察する上でも新たな視点として重要な指摘と考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）
① 柏崎順子、江戸初期出版界と伊勢、人文・自然研究、査読無、6 号、2012、93－120
② 柏崎順子、伴蒿蹊のみた亀田窮楽の軸一幅、太平詩屋、査読無、50 号、2011、23－27
③ 柏崎順子、鱗形屋、言語文化、一橋大学語学研究室、査読無、47 巻、2011、61－74
④ 柏崎順子、江戸版考　其三、人文・自然研究、査読無、第４号、2010、42－73
⑤ 柏崎順子、高橋華陽、言語文化、一橋大学語学研究室、査読無、46 巻、2009、41－55
⑥ 柏崎順子、江戸時代に思うこと、紀要上北、上北地方小学校校長会紀要、査読無、げんだ 43 号、2009、17－23
⑦ 柏崎順子、一橋大学付属図書館所蔵『圭星帖』紹介、書物・出版と社会変容、査読無、4 号、2008、1－34
⑧ 柏崎順子、江戸版考－版権の様相、日本古書通信、日本古書通信社、査読無、948 号、2008、4－6
⑨ 柏崎順子、松会三四郎　其の二、言語文化、一橋大学語学研究室、査読無、45 号、2008、3－16

上記論文は一橋大学機関リポジトリで公開しています。
http//hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/ir/index.html

〔学会発表〕（計２件）
① 柏崎順子、絵本ワークショップ、江戸版の考察を通してみる師宣風挿絵の展開、2010 年 12 月 2 日、大和文華館(奈良)
② 柏崎順子、日本近世文学会、初期江戸出版界と伊勢、2010 年 5 月 15 日、実践女子大学(東京)

〔図書〕（計３件）
① 柏崎順子、青裳堂書店、増補松会版書目、2009 年、256
② 柏崎順子、太平書屋、菅茶山遺稿、2009 年、303
③ 柏崎順子、明石書店、ジェンダーから世界を読む（第８章　江戸時代の女性観）、2008 年、312(160－176)

〔その他〕（計４件）
（招待講演・アウトリーチ活動）
① 柏崎順子、常陽新聞懇話会、江戸の情報革命、2011 年 6 月 29 日、筑波オークラホテル（茨城）
② 柏崎順子、一橋大学如水会、江戸の情報革命―出版が日本の社会にもたらしたもの、2011 年 4 月 21 日、如水会館（東京）
③ 柏崎順子、東京青森県人会、情報化社会の江戸に生きた人々、2008 年 10 月 17 日、青森東高校(青森)
④ 柏崎順子、東京青森県人会、情報化社会の江戸に生きた人々、2008 年 10 月 16 日、青森戸山高校(青森)

６．研究組織
(1)研究代表者
柏崎　順子（KASHIWAZAKI JUNKO）
一橋大学・大学院法学研究科・教授
研究者番号：２０２６２３８９